

小院瀨見 の新拠点

再生公民館 華やかにデビュー



昨年から改修整備を終えて今春、再スタートを切った小院瀨見公民館のお披露目イベントが4月20日に開かれ、地元出身者や農作業でこの地に通う人々、江ざらいなどで協力する近隣地域や県の関係者ら100人以上が詰めかけた。大にぎわいとなった。県外からの参加者も多く、昔と変わらぬ自然環境を満喫したりかつての小院瀨見分校時代を懐かしんだり。普段は静かな限界集落が新たな交流拠点誕生で大いに沸き立った。(2ページに関連記事)

お披露目イベントに100人超 地元産米 餅つきに集落沸く



おしゃれな装いの2階ではスイーツやグッズの販売コーナーも

昭和47(1972)年、廃校となった西太美小学校小院瀨見分校校舎を活用する形で開館した公民館。その後の急激な過疎化で役目を果たせなくなり15年ほど前からは使われずに荒廃していたが、ここ数年で集落を訪れる関係人口が急増したことから、小院瀨見自治会が1年がかりで修復、改装を進めてきた。

お披露目イベントは、出身者や関係者に現状を知ってもらい、集落の活性化を図る目的で自治会が企画。小院瀨見産の自然栽培米や小院瀨見新聞などとともに案内状を配布して来場を呼び掛けた。

開館前日、午前10時半の開館前から続々と参加者が到着した。館内には昭和38年39年に分校に新任教師が赴任した故・中村勇さんが作成したアルバムから、妻の寛子さんに承諾をいれた当時の写真を複写して展示。出身者有志から寄せられた写真もスライドにするなどして披露した。



つきたてのお餅をみんなで丸める

地元の住民はじめ、集落内の田園で耕作する女性や主体の一般社団法人「Honey & Cotton」(ハニー・アンド・コットン)や、畑田を「通称ハニコ」や、畑田を開墾、再生している小院瀨見くらぶのメンバーも協力し、地元産もち米の餅つきも行われた。来場者の親子も飛び入り参加して杵を振る、炊き上がったお餅をみんなで丸める。地区の新たな拠点として親しまれている。

集落の再生は、集落の活性化を図る目的で自治会が企画。小院瀨見産の自然栽培米や小院瀨見新聞などとともに案内状を配布して来場を呼び掛けた。

集落の再生は、集落の活性化を図る目的で自治会が企画。小院瀨見産の自然栽培米や小院瀨見新聞などとともに案内状を配布して来場を呼び掛けた。



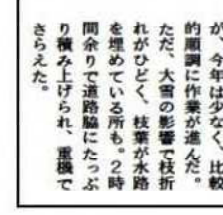
冬にたまった枝葉を除去してすっきりの水路

小院瀨見の農た。今も地元住民や西太美地区自治振興会有志の地域おこし支援隊、集落の南西方向や野菜づくりをしている山を上った中、Honey & Cottonのメンバーと小院瀨見くらぶのメンバーも協力し、地元産もち米の餅つきも行われた。来場者の親子も飛び入り参加して杵を振る、炊き上がったお餅をみんなで丸める。地区の新たな拠点として親しまれている。

小院瀨見分校はかつて、大正14年に移転建設された本館と昭和26年に新築された新館(現公民館)があった。今は新館だけが残るが、現在は富山県に住民ながら本院内の生家の世話を続ける山口清一さん(83)が通っている。



山口清一さん
当時思い出し
4月20日のお披露目イベントで公表した図は、新館建設前に教室や図書館として使われていた本館で子供たちが学ぶ様子をはじめ、本館、新館の平面図、昭和27年に学んでいた山口さんら児童全員の集合写真を元にした絵が描かれている。



「こいんぜみ〜」で皆笑顔

猪被害少なく
順調に作業
水路が土砂で埋まっていたが、今年は少なく、比較的順調に作業が進んだ。ただ、大雪の影響で枝折れがひどく、枝葉が水路を埋めている所も、2時間余りで道路脇にたどり着き上げられ、重機でさらえた。

猪被害少なく
順調に作業
水路が土砂で埋まっていたが、今年は少なく、比較的順調に作業が進んだ。ただ、大雪の影響で枝折れがひどく、枝葉が水路を埋めている所も、2時間余りで道路脇にたどり着き上げられ、重機でさらえた。

2面 新企画「探検 小院瀨見」スタート

経済も文化も 集落繁栄の産業遺産

1世紀前の石積み構造 驚異の技術

小院瀬見を訪れるようになってよく聞いたのが、かつて集落に繁栄をもたらした「小院瀬見発電所」の存在だ。十分な雇用を創出した原動力ともなっている村の経済、文化を支えたという。おそく北陸でも草分けの水力による発電拠点だったと思われるが、その痕跡は今も現地に残されている。

その一つが「導水路トンネル」。発電に必要な大量の水を小矢部川上流部から引くためのものだ。発電所の建設は1914（大正3）年。実に111年前のこと。石動電気株式会社（現・石動電気株式会社）が2月に400円で開業。4年後に800に増設された記録が残る。

導水路トンネルもこの当時のもの。1世紀を経た歴史遺産に4月26日、集落で唯一、代々住み続けて昔の姿をよく知る水口登洋治さん（82）に案内をお願いし、足を踏み入れた。

中根集落跡から林道を少し上った所のカーブから、かすかに痕跡を残す。進入路をしばらく進み、小矢部川へと向かう下り坂を降りると、間もなく、コンクリートの構造物が現れた。四角い大きな箱状のように見える。発電機に水を溜める貯水槽らしい。中へ入ると直徑が大人の背丈ほどの穴が見えた。導水路だった。当然、中は暗闇。懐中電灯を頼りに進む。天井は弧のどと思うと驚嘆する。

「懐中電灯頼りに進む」

さらに進んでいくと、壁や天井がごつごつした岩肌。そのままだとコンクリートがモタルを吹き付けたようになつた所も。その一部が溶け出して鍾乳石のように垂れ下がっていた。流量が多すぎた時に水を逃がす目的なのか、支線トンネルもいくつかあった。なぜか土



① 発電所の導水路



内部には無数のコウモリ。飛び回ってぶつかることも



不思議な小院瀬見を語る水口さん



小院瀬見発電所のQRコードを読み取ると、小院瀬見発電所の詳細な情報を得ることができます。

春祭りで豊作祈る

小院瀬見神明社

小院瀬見神明社の春祭りが今年も4月21日に行われ、住民や出身者に加え、集落内の田園や棚田で農業に携わっている人も多し。10人以上が今年の豊作などを祈った。

南砺市城端の安祥明宮の黒川睦子さんが祝詞を奏上。小院瀬見自治会の堀宗夫区長、地区で唯一、代々住み続けている水口登洋治さん（82）、今は南砺市に



豊作などを祈った神社の春祭り

出身者からは懐かしむ声

「中に入ったら涙出そうに」

地元の子供を大きく超えた同市遊部の水口正雄（89）も「昔は30軒も公民館のお披露目（イベント）も40軒も家があった。この久しぶりに訪れた出たことを思い出すが、やはり身からは家が激減した。自然はそのまま」と感慨を深げた。

分枝の最後の卒業生だった岩崎武則さん（67）は「同市小坂」は「懐かし」な場所。3年前に亡くなった母が集落出身で子供が加わったが、来た高岡市の植田彰子さん（30）は「公民館の建物は歴史を感じる。それを活用してイベントをやるといいのはすごい。ハニの知人で小院瀬見は同市の金沢大学院生、渡尻祥希さん（22）も「美しい所だけど多様性に富んで、すこパワーを感じる」と感服していた。



まるで力フェのような壁にくっつく、来場者

近年異例の10人余参加 地元や耕作グループも

うになつたと感嘆する。かつての分枝に入り、この建物は南砺の遺産と誇りに思っている。西太美自治振興会の有志で作り、小院瀬見の動きを西太美全体に広げたい」と思いを寄せた。

小院瀬見に初めて訪れた若者もあり、山の中の活気に興味をひかれた様子。子夫が果のときも農業・農村サポーター活動支援事業の登録サポーターとして集落の江ざらいに参加したつながりて来た高岡市の植田彰子さん（30）は「公民館の建物は歴史を感じる。それを活用してイベントをやるといいのはすごい。ハニの知人で小院瀬見は同市の金沢大学院生、渡尻祥希さん（22）も「美しい所だけど多様性に富んで、すこパワーを感じる」と感服していた。

〒939-1684
富山県南砺市
小院瀬見1361-1
編集担当
中島健二
電080-6359-3992

「福光麻布」産地づくり視野に

集落内の「めぐるファ-」の一角で行われたワークショップは、福島県昭和
けて並べて土をかぶせる同
県会津地方独特の手法で植
え付けた。
ムシによる糸を織（よ）
糸に、大麻を経（たて）
に交織してつくる。

ムシによる糸を繻（よこ）糸に、大麻を経（たて）糸に交織してつくる。

一部地域では現在も生産が盛んに行われているが、福光地帯の大部分は、工業工程が分業化されたことによって伝承者の高齢化・高齢化による、昭和の終わりとともに途絶えていた。

Case 3 として復興構想を掲げ、麻に強い関心を抱いていたグループが貴重な歴史資料の遺産を後世に残す目的を掲げてプロジェクトを立ち上げ始めた。伝承者への聞き取り調査で生産にまつわる記録を発掘するととも

設内に麻布ギャーリを開設。織機を開放して麻布の織り手首巻も図っている。カラムシも2003年3月に宮家さん夫妻を招いて小院瀬江で、生糸調査をすることともに、試験栽培をすすめてきた。堀代氏は「富士の歴史学会」「越中史談刊号」（1954年）の研究論文のテーマが福光麻だ。カラムシの栽培などを通じて、その復興に広東省心をもっていたいただきたい」と意気込みを話している。

初めのクマによる人身被害。連絡を要した娘はクマ出没警報を発した。が、男性は大きな音を立てるなどいへば熊の対策を取っていた。にもかかわらず襲われており、その後も市内でクマの目撃が頻発していることから、地元関係者は「重大な警戒を呼び掛けている」。

被害に遭ったのは同市田中のバーン職員、5月31日（63）。

マザサの若竹、を揉めてたところ、中西さんが「スダケ、チシを駆け降りるようやぶで、近づく力サガサと音がした直後、崖から駆け込んだ。厚着するササのなかから飛び出したツギクママに左足ふくらはぎをかま、通院を続けた。

**各地で目撃情報も続発
嚴重注意呼びかけ**

中西さんによるとクマ 小院瀬見など南は体長1メートル、視距離 山間地では4月下してからまだ時間短縮とみ 降、山菜取りで山

とた 人が多くな

「なるが、市街の中心部に入ると、奥の音ももたれてきた。まるで待たせていたが、急に飛び出してきた。普通は考えられない行動だ」と驚いていいた。一般的な防犯策が通じなかった事態は地元へ衝撃を広げていった。5月22日には今回の現場から400mほど離れた小院瀬見神明社でママの足跡が見つかったほか、6月に入ってから福光温泉橋まで小の矢部川を歩くクルマが確認されるなど市内各

小さな畑から福光麻布の産地化が始まる

A photograph showing four people (three men and one woman) standing in a field. They are positioned around a large, dense, brownish plant specimen that has been cut or fallen. The background shows a line of green trees and a clear sky. The people are dressed in casual outdoor attire, including hats and long pants.

2
月
探検・小・院・遊・園

山菜採り

南砺

南砺市小院内見で5月初め、山菜採りをしてきた市内の男性がツキノワ

市の男性足かまれて
 日朝小院瀧見の里野れた。
 外縁地広場から医止る
 を西へ向かう林邊戸
 って腰い掛かつて

の中、ス stake は不作
の年との見方が多く、
中西さんは「少ない食
べ物を人間と競い合う
状況で（今年のクマは）
興奮状態にあるのかもし
れない」と分析。やぶに
入る前には大きな音をた

スタッフが新した20平方メートルの畑に深さ10センチほどの溝を掘り、小院落見の自生地から掘り出した根を斜めに傾す。福光麻布は、この力

で出た。江戸時代には「福祿
麻布」の名が広く知られて
ようになったが木綿や化学
繊維の需要拡大に押されて

密集して自生する
カラムシの根を掘る

これがカラムシの根。部位によって異なる扱い方を説明する。宮家さん

自生地小瀬見で
畑づくりのWS

南砺市の男性足かまれる

山菜採りでクマに襲われ負傷

2面 探検小院瀬見・神秘の湖

懐かし校舎現存

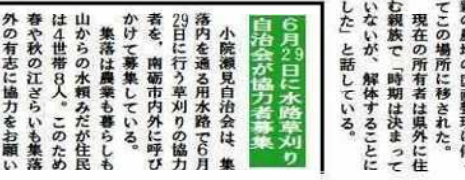
癒しの競演



「ガサガサと音がしたと思ったら、いきなり噛みつかれた」と現場（右奥）で語る中西さん。笛もラジオも全く効かなかった

人が多くなつては種類によつてはクマの餌になり、特
に好物とされるス
ダケが密生する
場所てよく目撃さ
れる。

今年は冬の大雪
の影響で山菜全体
の生育が遅れ気味
か確認されるなど市内各
地で毎日のように目撃情
報が伝えられており、小
院瀬川自治会の堀家夫会
長(73)は「危険でも山
に入らざるを得ない時も
ある。対策を取ることに
完全にはないと考えねば
ならない」と困惑している。





美しき田園 急がれる渇水対策

小庭瀬見新聞

2025年7月号

小庭瀬見新聞社

〒939-1764
富山県南砺市
吉見70番地
編集担当 中島健二
電話080-6359-3992

2面の連載

探検小庭瀬見

山中に謎の石板

文字か数の印か

命綱唯一の水路も流量は限界

猛暑少雨で水不足頻発 課題を露呈

農業も肥料も使わない「自然栽培の里」を謳(うた)う小庭瀬見の田んぼで今夏、稲作には欠かせない水の不足がたびたび発生、集落における今後の米づくりの課題を浮き彫りにした。農業向けの水路は地区を貫く水路が事実上唯一の供給源だが、現状の耕作地を賄う量としてはほぼ限界状態。来季には耕作の拡大も計画されており、自治会では水路の機能調査を行うなど対策に乗り出す考えだ。

小庭瀬見では、集落内での農業や養蜂なども展開する Honey & Cottage (ハニー・アンド・コテージ) 通称ハニコ、をほじめる。その田んぼの命綱といえる水路は、集落から西へ1.5km、金沢市や富山県内各地から通いながら即成寺裏の耕作放棄地だった圃田を復元させた小庭瀬見くらぶが稲作を行っている。

さらに福光麻布復興を軸に自然と共に暮らす豊かな農村実現を目指して活動する自治会が水路調査、秋に修繕

自治会が水路調査、秋に修繕



特に今年の6月は梅雨入り後も雨が降らないうちが極端に多く、猛暑が続いたことによる、公民館の南側に広がるハニコが耕作地となつた。公民館から100mほど下流の水路の終点まで水が届かず、U字溝の底が乾く事態もたびたび起き



美しい田園も水不足が悩み

た。自治会では、水門付近の大谷川の石の配置を調整するなどして水量を確保し、水路途上の取水口の確保などもして事なきを得た。だが、下流での流量減少はさらに悪化した。U字溝の継ぎ目からの漏水が原因とみられ、今後悪化する可能性が高い。今後は小庭瀬見では関係人口の増加もあり、耕作放棄地となつていく集落最南部の田んぼ数枚に耕作を再開することが計画されている。集落のさらなる活性化にもつながる動きだが、これ以上水不足は地域の米づくり全体に大きな影響が及ぶことになる。自治会では何らかの対策を講じる考えで、まずは水路の現状を把握するため7月8日、水源

から終点まで全線を対象に水量変化の調査を行った。その結果、集落を通過する時点で40%水量が減少。さらに神明社裏から終点までの間で半減したことが判明した。漏水がかなりあるとみられ、自治会は今秋にも修復工事を行うなど対処していく。堀家大蔵氏は「来年は耕作地が増えていく。水は大きな問題なので慎重に対処したい」と話している。



水路の水源は、大谷川では石の配置で流量調整

水守れ 草刈りに30人



小庭瀬見自治会では6月29日、地域の暮らしを支える水の供給を維持するため、集落を貫いて流れる水路の草刈りを行った。人ほどが草刈り機や鎌、スコップなどを手に山へ入った。森林サポーターは県の森づくり塾の修了生らで組織するグループ。今回は昨年、県による山村活動の支援

小庭瀬見の実情を「取材」

草刈り参加の富大生

自治会の募集を受けて自身で決めて調査する水路の草刈りに加わったという学部生3人。富山大教育学部の学生3人、この地がうつつけ人全員、小庭瀬見を初めて訪れた。なぜ、ここで住民へのインタビューをするなど授業のため、取材活動も展開した。3人はいずれも3年生で、富山県横浜市の三浦悦彦さん、富山市の尾近五(おごん)さん、富山市の尾近五(おごん)さん。この環境につながっている。「小庭瀬見の自然は草刈りに取り組んだ後、集落の現状を聞きながら、充実した取材ができた」と話していた。

2面

の 股 襲



貴重な水の確保に向けて掘られたが、加賀藩が阻止して使われなかった隧道

小院瀬見の南端、石川県境に近い山中にひっそり水をたたえた謎だらけの湖がある。高級食材の蓴菜（じゅんさい）が採れると伝わることは弊紙6月号で紹介したが、山の頂近くに自然湖が存在すること自体、不思議な話。中でも東側の湖岸から山の尾根を貫く隧道はいつ誰がなぜ掘ったのか資料も痕跡もないミステリアスな存在だったが先日、貴重な水を運って数奇な運命をたどった驚きの歴史が明らかになった。

神秘の湖水「横根の池」 山口さんの父が経緯記憶

「あれは、昔から田畑や暮らしの水が不足していた集落に湖水を引くため掘られたものです。そう語るのは小院瀬見集落出身で今は富山県に住む山口清一さん（83）。20年前に99歳で亡くなった父、誠一（さん）がその経緯を話しているのを記憶していたという。その話によると、湖はもと「横根の池」と呼ばれ、おそらく江戸の末期ごろ、村の人が湖から

水源求め掘削も加賀藩が阻止

「あれは、昔から田畑や暮らしの水が不足していた集落に湖水を引くため掘られたものです。そう語るのは小院瀬見集落出身で今は富山県に住む山口清一さん（83）。20年前に99歳で亡くなった父、誠一（さん）がその経緯を話しているのを記憶していたという。その話によると、湖はもと「横根の池」と呼ばれ、おそらく江戸の末期ごろ、村の人が湖から



山の頂近くに枯れない水をたたえる横根の池。湖岸が緑のよう

願いを託して掘り進められた隧道だったが、まさか知った加賀藩が突然、スト

熾烈極めた水源確保 藩巻き込む抗争に？

「水は、かつては、山間地では、昔から水が不足しがちで、各地の村は水源の確保に躍起となっていた。特に小院瀬見村は急な山が連なる険しい地形で、水に頼っていたのは事実。それに、夏も水が枯れることがあったと言われた横根の池は、地味な水源地であり、引水は地域の悲劇だったとみられる。



も5月下旬、弊紙連載「小院瀬見探検隊」の取材で現地を案内してもらった際、加賀藩の国境の変更に触れていた。この時に見た隧道は、幅1尺前後、高さ1尺の青土で、中へは入らなかつたが手作業で掘られたとみられる。内部はかなり狭く、途中で加賀藩から阻止されたため未完成だった可能性もありそうだ。

水源の望みが絶たれた村人たちはその後、小院瀬見と中根でそれぞれため池を構築したが、いずれも漏水がひどく、ほとんど用をなさなかったという。一方、山口さんによると、地形などから加賀藩は今の金沢市横谷あたりに水を流すつもりだった。横谷などは見つかっていないが、山村と水の、命にかかわるほどに深い関係を物語っている。現地のさらなる調査や保存の方策も考えていきたい。



畝に溝を作り、そばの種を植える小院瀬見ぐらぶのメンバーたち

旧即成寺の裏で耕作放棄地。近くの水口登喜され荒れ放題となつていた田を開墾。昨年か、所有で、かつては米や野菜、果物づくりを展開する「小院瀬見ぐらぶ」が、空き地状態となつていたほ場で、栽培を始めた。順調に進めば10月後半にも収穫する見通しで、メンバーや集落の住民は大晦日の年越しそばを楽しましにしている。

小院瀬見ぐらぶが、そばづくりの検討を始めたのは今春、田のすく近場にある水口さんのほ場に注目し、6月に使用を申し入れたところ、水口さんが快諾。8月初めにメ

集落の遊休ほ場でそば栽培 小院瀬見ぐらぶが挑戦

ンバーの新運搬機を持ち込みに13人のメンバーが朝から集まり、53の種を植えた。小院瀬見ぐらぶが、そばづくりの検討を始めたのは今春、田のすく近場にある水口さんのほ場に注目し、6月に使用を申し入れたところ、水口さんが快諾。8月初めにメ

53の種を植えた。小院瀬見ぐらぶが、そばづくりの検討を始めたのは今春、田のすく近場にある水口さんのほ場に注目し、6月に使用を申し入れたところ、水口さんが快諾。8月初めにメ

小院瀬見ぐらぶが、そばづくりの検討を始めたのは今春、田のすく近場にある水口さんのほ場に注目し、6月に使用を申し入れたところ、水口さんが快諾。8月初めにメ

2面 渇水に豪雨 集落翻弄
期待されるハニコ新水源
移住し米づくり 独立を目指す



ハニコが旧水源復活

小庭瀬見集落内の2つの旧水源の復活が、今年7月、極端な晴天と高温続きで用水路の水位が低下し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。

小庭瀬見集落内の2つの旧水源の復活が、今年7月、極端な晴天と高温続きで用水路の水位が低下し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。

小庭瀬見集落内の2つの旧水源の復活が、今年7月、極端な晴天と高温続きで用水路の水位が低下し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。



小庭瀬見で独立を目指す余川迅斗さん

高温渇水一転豪雨 異常な夏空 里山も

濁流逆巻く大谷川



酷暑の日照りが続けば線状降水帯も荒れ狂う。危うい今夏の日本の空模様だが、南砺市の小庭瀬見など医王山ろく一帯でも7月、極端な晴天と高温続きで用水路の水位が低下し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。

田んぼはひび割れ…



酷暑の日照りが続けば線状降水帯も荒れ狂う。危うい今夏の日本の空模様だが、南砺市の小庭瀬見など医王山ろく一帯でも7月、極端な晴天と高温続きで用水路の水位が低下し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。

異常な夏空 里山も

各地の用水は流量が激減し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。



小庭瀬見集落内の2つの旧水源の復活が、今年7月、極端な晴天と高温続きで用水路の水位が低下し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。

各地の用水は流量が激減し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。

小庭瀬見集落内の2つの旧水源の復活が、今年7月、極端な晴天と高温続きで用水路の水位が低下し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。

小庭瀬見集落内の2つの旧水源の復活が、今年7月、極端な晴天と高温続きで用水路の水位が低下し、田んぼの水不足が関係者を悩ませてきた一方、8月に入ると豪雨で用水路に大量の土砂がたまる被害も発生。小庭瀬見自治会が緊急の江ざらいを行うなど、異例すくめの気象の猛威に集落は翻弄（ほんろう）された。

自然栽培農業で独立目指す 古見に移住し米づくり

小庭瀬見の田園でHoney & Cotton (ハニコ)の協力者として昨年、米づくりに加わる余川迅斗（はやと）さん（23）が7月、小庭瀬見を挟んで対岸の南砺市吉見にあるカーサ・エッセ・ハウスに移住してきた。車で5分足らずの直近から、通いながら小庭瀬見での本格農業展開に向け自分を磨いていくという。



小庭瀬見出身。樹から葉が落ちる場所を模索。そのランニング好きで、田園の道を走りながら見えてきた田んぼでの農業風景を美しく感じ、土の香りにも誘われるように、志しを込めて共同代表の松本千尋さんに小庭瀬見を案内され、内定された。直感的に「ここが自分にとっていい場所だ」と感じた。余川迅斗（はやと）さん（23）が7月、小庭瀬見を挟んで対岸の南砺市吉見にあるカーサ・エッセ・ハウスに移住してきた。車で5分足らずの直近から、通いながら小庭瀬見での本格農業展開に向け自分を磨いていくという。

小庭瀬見で独立を目指す余川迅斗さん

小院瀬見に「Casa出版」誕生

集落初の本づくり独立機関

「村が生きていくために」堀代表

南砺市的小院瀬見地区に本拠を置き、本や雑誌を企画、制作、発行する「Casa（カーサ）出版」が今夏、誕生した。地区ではこれまで桂書房（富山市）が小院瀬見編集所として南砺や地元関係書籍の発行業務を行ってきたが、編集所代表の堀宗夫さん（74）＝地区自治会長＝が桂書房から独立させる形で設立。既に最初の書籍も発行し今後、独自の企画編集出版を展開しながら集落自立に向けての輪にしていける。

「Casa」は、福光麻布の復興を主体に自然と共に暮らしを営む小院瀬見地区に暮らす農村実現を目指して堀宗夫さんら有志メンバーが集まって発足し、小院瀬見を拠点に活動している団体の名称。語源は「故郷」や「家」を意味するスペイン語で、地区復興の象徴的存在でもあり、出版社として採用、6月に設立手続きを終えた。

7月末に最初の出版物として発行したのは、岐阜県飛騨市の元保険会社サラリーマンでそば打ちからそばの新品種開発まで手がけ、SNS投稿も人気を博す石田五十六さんのブログ集「ダメンズの独り言 百八話」。知人からの紹介を受けた堀さんが編集を担当し、小院瀬見出身者の親戚で新進気鋭の画家、ituka（いつか）さんが表紙

に描いた「ダメンズの独り言 百八話」の表紙。堀さんが編集を担当し、小院瀬見出身者の親戚で新進気鋭の画家、ituka（いつか）さんが表紙に描いた「ダメンズの独り言 百八話」の表紙。堀さんが編集を担当し、小院瀬見出身者の親戚で新進気鋭の画家、ituka（いつか）さんが表紙に描いた「ダメンズの独り言 百八話」の表紙。

に描いた「ダメンズの独り言 百八話」の表紙。堀さんが編集を担当し、小院瀬見出身者の親戚で新進気鋭の画家、ituka（いつか）さんが表紙に描いた「ダメンズの独り言 百八話」の表紙。堀さんが編集を担当し、小院瀬見出身者の親戚で新進気鋭の画家、ituka（いつか）さんが表紙に描いた「ダメンズの独り言 百八話」の表紙。



2025年9月号

小院瀬見新聞社

〒939-1764
富山県南砺市
吉見70番地
編集担当 中島健二
電080-6359-3982



石田五十六 著

ダメンズの独り言 百八話

保険会社のサラリーマンとして全国を転動した著者が2024年にブログ「NOTE」に投稿した中の108話を収録。軽快で自由な表現に吸い込まれるような感覚で時間を忘れた。

「ダメンズ」は、だめ男。それ自認し、3度の飯を食えるだけ



Casa出版の編集作業に臨む堀宗夫代表

その後、桂書房の小院瀬見編集所を開設。これまでに地域の歴史・文化をはじめ、世界に知られた板画家で福光に疎通していた横方志功関係の書籍など20冊近くを出版してきた。そんな堀さんが愛してやまない小院瀬見が現在、常時居住

2面

糸文化の集中研修

簡易ビジネスで獣害ゼロ

山里の月一居酒屋大盛況

収穫の秋目前 田園は豊作の予感も

小院瀬見の公民館南側に育っていた。イノシシに市道と林を隔てて広がった。被害もなく稲刈り時期を待っている。今夏は適度な気象が続く。期待も高まっている。



猛暑・渇水影響なく順調生育

が能の庶民だともいう著者は、そば打ちが高じてそばの新品種まで開発。なので内容もそばのごく軽妙な笑いに終始かと迂闊（うかつ）に思ってしまったがとんで冒頭の四季のうつろいは解きほぐしてくる。

庶民目線 軽快に不合理切る 食糧危機の原点も突く 不合理が庶民を襲う。世の仕組み、特に政治には厳しい。切り裂き方が巧みだ例えは「金魚のうんこ」を絶妙な形容句として自民党という金魚につく「金魚のうんこ」で、分かって

食の安全保障に話がつながる。政治や国際紛争、憲法論、資本主義、メディアなど幅広いに圧迫される。解ではない。言葉や文章の組み合わせの妙、分りやすく多彩な言葉が先入観を解きほぐしてくる。おびたしかった。オスさんの性も半ば直観的に描きながらの一言一語に思わすにやり。千変万化で楽しませてくれる。



Itukaさんの挿絵

小泉瀧見
カレンダー

【9月】
21日 神明宮の秋の例祭（收穫に感謝し来季豐作祈願）14時～
29日 秋の江ざらい（用水路脇草刈り）7時45分に即成寺集合

木村高顕さん（右端）の指導で精麻を割いて糸に績む作業に挑戦する
金沢美大生たち＝南砺市綱町の湯光麻布ギャラリーで



根が、必要な
手作業が学生
たちは興味深
うに作業に集
中。千番出身の
草場風香さん
（20）は「綿か
ら糸を紡ぐのは
経験しかなかった
の植物を削って
糸にしたことは
なかった。それ
を織る工程にな
る（ふくのじま）の綿糸を紡

組（つくひき）が好きで
染織科に入った川原白山
市の石野太斗さん（19）も
「同じように単純作業を結ん
で長い糸にする過程が、あ
じょうふを見たことがあ
り、糸を織むことをやって
みたかったので体験できて
よかった」と伝統工芸の魅
力にひかれた様子だった。
このほか研修では塩野郷

将来の後継育生へまず体験
シソウラボが今後見据え

にある福光麻布ギ
ヤラリとして
織造素材として
の大麻の皮と芯
の間から取り出
された精麻から
糸を作り出す作
業に学生らが挑
にした。

ギヤラリースタッフの木
村高嗣（こうえい）さん
指導し、精麻を細く切り製
き、縫（よ）って長くつな
いでいく。織（う）むと
呼ばれる手法で糸にし、そ
れを機械に掛けて麻布を
にした。

南砺市に古くから伝えられてきた麻や絹、木綿の糸づくり文化を巡り、その技術を学ぶ「南砺の糸文化・夏季集中研修」が9月2～5日、市内各地で行われた。昨年に続き2回目の今年も金沢美術工芸大の工芸科染織コースの2年生6人が参加し、福光麻布の糸づくりなどを体験、伝統の技術を学んだ。

同市の田井波町を拠点に起業家の伴走者を展開するまちづくり団体（一般社団法人）「ジソウボ」が市と南砺文化芸術振興機構の協力で企画。初日に市役所前地下の床座では「ジソウボ理事の田井波大地さん」(49)が田井波光、城崎、井波、福野の各町や五山でかつて産業として続いていた糸や織物の歴史、現状を説明した。

それを踏まえて翌10日からは復興や伝承に向けた取組を行う各地の団体や行政組織など、技術研修や学字などにも臨んだ。

最初の研修の場となった同市綱掛にある福光糸布辛



各地の茶文化の歴史などを学んだ研修初日の座学Ⅱ南

源が盛んだった五箇山の旧平村にある相倉合掌集落で昔の養蚕の現場である合掌造り家屋も見学するなどは。ジソウウラの前川さんとは「将来的には後継者づくり、産業化を目指したいが、まずは見て体験し、興味を持ってもらうことから取り組んでいきたい」と今後にも期待を寄せた。

今季の田園 獣害激減 防獣フェンス絶大効果

昨年の被害教訓に自治会が設置

電柵より高効率で労力軽減

現在、発生していない。地区自治会が設置した金製の簡易フェンスが侵入を阻止していると考えられ、予想以上の効果を発揮している。



小院東見の田園居用に張り巡らされたフェンスは絶大な効果を発揮している

南側の小矢部川河岸沿いの400mほどにわたり、木杭を打ち込んだ上で張り巡らせた。田圃では昨年までイノシシ被害が頻発していた。こ



イノシシに襲われて荒らされた昨年の田圃

山里の夜ビールで住民交流
ふとみほれがツキイチ居酒屋

で住民交流
キイチ居酒屋

中山開地には随ってもない居酒屋が南朝市太美の交流施設に「ふとみべれ」にオープンした。その名も「ふとみべれ cafe（カフェ）」太美山城づくし協議会が毎月一回開く居する計画で、試験的に営業した月23日は地元の人たちが日夜と詰めかけ、大いににぎわった。

ごみちゃん食宴」の調理

市で協議会が企画、事業のコミュニティ活動とみべれのやまびこホール（施設の前身、太美山保育園時代の遊戯室）にテーブルを並べて客席にし、生ビールやチューハイをはじめ唐揚げや牛筋煮込み、枝豆、チヂミなどの料理もそろえて午後5時に開店した。

当初用意した20席はすぐに満席。その後も続々と来場者があつたことから急ぎで増設した。

「福光温泉にあった「ごみちゃん食宴」の調理を担当、松本日和子さんが用意した料理は即完売。高齢者や子供の姿も見られ、にぎやかな夜のひと時が続いた。

「地域の皆さんの居場所づくりになれば」と協議会。次回は9月20日午後5時開店で、二軒ものやデザート付きコースメニューで臨む。協議会会長は継続して若男男女が交流できる憩いの場になつてほしいと期待している。

自治会は今年10月、集落の西端にある田んぼで、マメ科の緑肥植物であるレンゲの栽培を始める。

レンゲは、根に共生する根粒菌が空気中の窒素を土壌に固定し、地力増進に役立つとされる。美しい花を咲かせるため小矢部川を挟んだ対岸の立野脇から景観も楽しめそうだ。立野脇ではHoney&Cotton(ハニー・アンド・コットン)が養蜂を行っている。自治会が養蜂をすることも想定している。

蔓性植物が巻き付くと冬季に積雪で破損する懸念がある。このため蔓の除去作業が求められるが、電気柵での草刈りに比べればはるかに労力は軽減される。今は稲刈り前の大事な時期でもあり、関係者は「このまま被害がなければ収穫は期待